



## 歴史的視点から見たヨーロッパの自己証言文：新たなアプローチ

著者	ウルブリヒ クラウディア
雑誌名	同志社コリア研究叢書
巻	1
ページ	38-58
発行年	2014-03-10
権利	同志社コリア研究センター
URL	<a href="http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016036">http://doi.org/10.14988/re.2017.0000016036</a>

## 2 歴史的視点から見たヨーロッパの 自己証言文 |

—新たなアプローチ—

クラウディア・ウルブリヒ

### 1. はじめに

自己証言文は、近年ヨーロッパで一つの研究分野として定着した<sup>1</sup>。オランダの研究から始まったエゴドキュメント (Egodocument) という概念が1980年代に導入されて以来、エゴドキュメントとされるテキストが次々に発見された<sup>2</sup>。この概念により、英語圏では日記、回顧録、私信、その他の自伝的文書が一つのテキスト群として統合された。またフランスでも2003年以降、回顧録、自伝、家や家族に関する記録、日記、年代記、年鑑が体系的に収集された。こうしたテキスト群をフランス語では私的の内面文献 (Les écrits du for privé) と呼ぶ<sup>3</sup>。ドイツ、オーストリア、スイスなどのドイ

---

<sup>1</sup> 最近の研究について概観するには、以下を参照。Claudia Ulbrich, Hans Medick und Angelika Schaser (Hg.), "Selbstzeugnis und Person: Transkulturelle Perspektiven", Dies. (Hg.) *Selbstzeugnis und Person: Transkulturelle Perspektiven*, Köln/Weimar/Wien: Böhlau, 2012.1-19; Gabriele Jancke und Claudia Ulbrich, "Vom Individuum zur Person. Neue Konzepte im Spannungsfeld von Autobiographietheorie und Selbstzeugnisforschung", Dies. (Hg.) *Vom Individuum zur Person. Neue Konzepte im Spannungsfeld von Autobiographietheorie und Selbstzeugnisforschung*, Göttingen: Wallstein, 2005, 7-27; トランスカルチャー的な視点から見た自己証言文についての研究プロジェクトについては、以下を参照。<http://www.cms.fu-berlin.de/dfg-fg/fg530/forscherguppe/ulbrich.html> [2012.7.10. 閲覧]

<sup>2</sup> オランダの自己証言文研究については、以下を参照。Onderzoeksinstituut Egodocument en Geschiedenis, <http://www.egodocument.net> [2012.7.10. 閲覧]

<sup>3</sup> パリ・ソルボンヌ大学に設立された Jean-Pierre Bardet と François-Joseph Ruggiu の率いる研究グループ (GDR 2649 "Les écrits du for privé en France de la fin du Moyen Âge à 1914") には、既に多数の出版物がある。研究グループの活動を概観するには、以下を参照。<http://www.ecritsduforprive.fr/> [2011.10.21. 閲覧]

ツ語圏では、文学研究の自伝理論への取り組みのなかで、自己証言文（Selbstzeugnis）という概念が長いあいだ認められてきた。この言葉は、西欧諸国において、英語のエゴドキュメントの概念で包括されるテキスト群と同じ内容を示す。歴史学研究は、自伝を正典形成のための基準としないことにより、ほぼ無尽蔵の史料の貯水池を開拓した。

歴史学が幅広い種類のテキストを扱ったのに対して、文学は自伝という概念にこだわり続けた。このような立場に決定的な影響を与えたのは、フィリップ・ルジュンヌ（Philipp Lejeune）による自伝の定義づけに関する考察である。これによると、自伝とは、「実在する人物が自らの存在について語る回顧的な散文であり、その人自身の人生、とくにその人に起こったできごとを強調する」<sup>4</sup>ものである。回顧的に語るという点で、自伝は、執筆者がごく最近の自分の生活を描写する日記、手紙とは区別される。グスタフ・ルネ・ホッケ（Gustav René Hocke）によれば、日記は、直接的であること、文体への無関心、個人的なものと客観的なものの並置、部分的なスタッカートとレガートの混合を特徴とする<sup>5</sup>。ジャンル理論において、日記は未発達状態の文学であり、ラルフ＝ライナー・ヴァーテノー（Ralph-Rainer Wuthenow）の表現を借りれば「未加工状態の文学」と見なすことができる<sup>6</sup>。しかし、ここ20年のあいだに、文学における自伝研究は、他からの独立性がきわめて高まった。フィクション文学とノンフィクション文学のあいだに明白な区分があるのと同様に、自伝ジャンルの境界についての問題が提起された<sup>7</sup>。かつての文献では、全ての自伝的テキスト・ジャンルは、率

<sup>4</sup> Philippe Lejeune, *Der autobiographische Pakt*, übers. v. Wolfram Bayer und Dieter Hornig, Frankfurt am Main: Suhrkamp, 1994, 14.

<sup>5</sup> Gustav René Hocke, *Das europäische Tagebuch*, Frankfurt am Main: Fischer, 1991, 21.

<sup>6</sup> Ralph-Rainer Wuthenow, *Europäische Tagebücher. Eigenart, Formen, Entwicklung*, Darmstadt WBG, 1990, IX.

<sup>7</sup> Martina Wagner-Egelhaaf, *Autobiographie (=Sammlung Metzler: Bd. 323)*, Stuttgart u.a.: Metzler, 2. Aufl. 2005; Arno Dusini, *Tagebuch. Möglichkeiten einer Gattung*, München: Fink, 2005.

直性、真実性、実際の生活との密着性によって特徴づけられるという立場が根強く支持されていたが、近年、日記もまた自伝的な行為として真摯に受け止められ、文学形式として総合的に研究されるようになった。

文学と歴史学が、部分的に同一のテキストを使って作業を行い、似たような問題について考察することもあるが、自伝的テキストの研究については、相互の交流はほとんどない。本論では、ヨーロッパにおける自己証言研究の新しい発展過程を概観し、それを歴史的、文学的日記研究と関連づける。まずは自己証言研究の伝統と近代性に関する問題から見ていきたい。この問題は、自律的な個人の形成が、近代の成立に中心的な役割を果たしたという考えと密接に関係するものである。

## 2. 自伝、個人化と近代

ヨーロッパ及び北アメリカの歴史学のさまざまなマクロ概念は、世俗的、自律的、自意識的個人の形成が西欧的近代の成立に中心的な役割を果たしたという考えに基づいている。この考えは19世紀の人文学と文化学に端を発する。ヤーコプ・ブルクハルト (Jacob Burckhardt) は、『イタリアルネッサンス文化』(1860) で、「近代的個人」を研究対象とした。彼のテーゼは、14世紀にまずイタリアにおいて、自律的な個人が発展しうる新世界が生まれたというものである。ブルクハルトにとって個人とは、歴史的発展のいかなる瞬間にも現れる歴史的普遍性であった。たびたび引用される文章で、彼は、当時の古びた社会的産物が重要性を喪失するなかで人間自らが自身を認識できる余地が生まれた、と指摘する。

「中世には、意識の両面が、即ち外の世界に向かう面と人間自身の内側に向かう面が、同じヴェールの下にまるで夢を見たり半分覚醒しているように存在した。このヴェールは、信仰や子供じみた偏見や妄想

で織られていた。ヴェールを通して見るため、世界とできごとは奇妙な色をかけたように見えた。ところで、人間は自身を人種、国民、政党、団体、家族、またはその他のある一般的全体的な形態の中だけで認識した。まずイタリアにおいてこのヴェールは風に飛ばされた。人々は国家と世界のすべての事物を客観的〔傍点部は、原文では斜体〕に見て対峙することに目覚めた。しかし同時に、ものすごい力で主観性が生まれ、人間は精神的な個人となり、自身をそのような存在と悟る。』<sup>8</sup>

歴史過程に関するブルクハルトの解釈は、現代にも影響力がある。個人化という概念は、人間をより大きな社会集団に包み込むことの反対概念と考えられている。例えば、ヴィンフリート・シュルツェ (Winfried Schulze) の主張によると、個人化は「そのときどきのグループに特有の結びつきからの解放、そのときどきの規範体系からの方向転換、新しい表現形態の使用」<sup>9</sup>として理解されうる。もちろん、個人化について別な見方をする社会学的理論もあり、例えば個人化の過程には社会的ネットワークが重要であると指摘する。しかし近代成立は、以前から、基本的に社会学理論よりは、ヤーコプ・ブルクハルトに遡及する個人化理論とそれと結びついたヨーロッパ中心主義的研究に注目して説明されてきた<sup>10</sup>。ヤーコプ・ブルクハルトにとって近代的個人の生成を示す重要なきざしが、伝記と自伝の登場であ

<sup>8</sup> Jacob Burckhardt, *Die Kultur der Renaissance in Italien. Ein Versuch*, 11. Aufl., hg. v. Konrad Hoffmann, Stuttgart: Metzler 1988 (zuerst 1860, 2. vom Autor ergänzte Aufl. 1869), 99.

<sup>9</sup> Winfried Schulze, "Das Wagnis der Individualisierung", in *Wege in die Neuzeit*, (Hg.) Thomas Cramer, München: Fink 1988, 270-286, hier 272. [[http://www.historicum.net/fileadmin/sxw/Lehren\\_Lernen/Schulze/Das\\_Wagnis\\_der\\_Individualisierung.pdf](http://www.historicum.net/fileadmin/sxw/Lehren_Lernen/Schulze/Das_Wagnis_der_Individualisierung.pdf)].

<sup>10</sup> Gabriele Jancke, "Patronagebeziehungen in autobiographischen Schriften des 16. Jahrhunderts - Individualisierungsweisen?"; in *Selbstzeugnisse in der Frühen Neuzeit. Individualisierungsweisen in interdisziplinärer Perspektive*, (Hg.) Kaspar von Greyerz, München: Oldenbourg Wissenschaftsverlag, 2007, 13-29.

り、それにより精神史的な研究の伝統が生まれ、今もなお自己証言文研究と日記研究に影響を与えている。

この点に関しては、特にゲオルク・ミッシュ (Georg Misch) の研究によるところが大きい<sup>11</sup>。ヤーコプ・ブルクハルトは、すでにイタリアに目を向け、個性意識の高まりと自伝の開花との関連性を指摘していたが、ディルタイの弟子、ゲオルク・ミッシュは、1904年に完成した自伝の歴史のなかで、ブルクハルトのこの考察を直接受け継ぎ、自伝は「人間の自由な自主性の表現手段」として、ルネッサンス時代に「本来の基礎を置く」というテーゼを表明した<sup>12</sup>。このテーゼは、以後彼の研究で何度も取り上げられた。ミッシュの関心は「西欧人の個性意識の発展」に向けられていたものの、とりわけ古代ギリシャ・ローマの人間形成の伝統に影響を受けた文化に注目した<sup>13</sup>。そして、ビザンティンとアラビアの伝統と比較することにより、キリスト教的西洋文化の特殊性を徹底的に研究した。彼にとっては、自伝のテキスト群を「ヨーロッパ文化における人間精神の発展という普遍的な歴史と関連づけて」把握することが重要であった。キリスト教的西洋文化においてのみ、彼は「将来性のある発展」を認めたのである<sup>14</sup>。

ブルクハルト、ミッシュ、さらにその他何人かの学者による研究は、個々の視点に対して批判を受けてはいるものの、比較的最近の研究が自伝的テキストにアプローチする際の概念に、今も影響を及ぼしている。ラルフ＝ライナー・ヴーテノーもまた、ヨーロッパの日記を分析するなかで、「ヨーロッパではルネサンス以降次第に日記の伝統が形成されたが、これは多く

---

<sup>11</sup> Georg Misch, *Geschichte der Autobiographie*, 4 Bde. Bern 1949, Frankfurt/M. 1950-1969.

<sup>12</sup> Georg Misch, *Geschichte der Autobiographie*, (wie Anm. 11) IV, 2, 573.

<sup>13</sup> Georg Misch, "Begriff und Ursprung der Autobiographie", in *Die Autobiographie. Zu Form und Geschichte einer literarischen Gattung*, (Hg.) G. Niggel, Darmstadt: Wiss. Buchgesellschaft 1989, 33-54, 36.

<sup>14</sup> Georg Misch, *Geschichte der Autobiographie*, (wie Anm. 11) III, 2, 74.

の自伝にも見られるように、西洋の自意識の歴史と関連がある』<sup>15</sup>と、強調する。

このような研究では、個人 (Individuum) や人格 (Person)、または自己 (Selbst) は、しばしば本質主義的に考えられる。そうした解釈に従えば、自意識の形だけの変遷を免れない。自意識は個性と密接に関連し、個性の歴史は個人の発見や発達の歴史として描写される。自己は特定の歴史的状況において外に顕れ、影響を及ぼす。このような一方的な自己へのアプローチがどれほど問題をはらんでいるかについて、デイビッド・サベーン (David Sabeen) は、人格概念に関する研究のなかで次のように述べた。「自己となり、自己を実行し、自己を認識する別の方法がどの時代にもあるということが理解されていない。牧師、神父、医者、下級役人、教師によって広められた見解は受け入れられているが、こうした説明のほとんどは、国家について語っておらず、権力を度外視している。」<sup>16</sup>古びた精神史概念に対しては多くの批判が集まったものの、自己証言文は、個性の発展に関する問いに依然として囚われており、人格に関するほかの概念は注目されないままである。

このことは、1800年頃の自伝を理論形成の出発点にした比較的古い文学的自伝研究にも該当する。テキスト群はしばしば「意識や人格のしかるべき状態は、すでに到達されたのか、まだなのか。著者は伝統だけでなく宗教的、社会的束縛から独立したのか。「内なる生」という主題はどのような相対的意義をもつのか。自己省察を合理的に説明・分析する際に、表現はどの程度識別できるのか」<sup>17</sup>という問いに基づいて読まれた。自伝が典型的なヨーロッパの著作形態であるという点は、ジョルジュ・ギュストル

---

<sup>15</sup> Wuthenow, *Europäische Tagebücher. Eigenart, Formen, Entwicklung* (wie Anm. 6), 28.

<sup>16</sup> David Sabeen und Claudia Ulbrich, "Personkonzepte in der Frühen Neuzeit", in *Etablierte Wissenschaft und feministische Theorie im Dialog*, (Hg.) Claudia von Braunmühl, (Berlin: BWV, 2003), 99-112, hier 101.

<sup>17</sup> Jancke/Ulbrich (wie Anm. 1), 16.

フ (Georges Gusdorf) とロイ・パスカル (Roy Pascal) にとっても疑問の余地がなかった。ゲオルク・ミッシュは人格意識の生成を「人間全体の可能性」と見たが、ジョルジュ・ギュスドルフは1950年代に広まった文明段階理論に依って自伝の可能性をはっきりと西洋人に限定する。成熟した西洋社会でのみ人間が自分自身への意識を発展させ表現したというのである<sup>18</sup>。西洋の個人主義という普遍主義的概念は、非西洋社会にも適用され、その結果、記述するという固有の伝統がゆがめられた。オスマン帝国と関連して例をひとつだけあげよう。自分自身について記述することは、人間が自身を自律的個人として理解した場合にのみ可能であるという見解によって、19世紀以前のオスマン社会には自己証言文が全くなかったと思われていた。19世紀以前に自己自身について書かれたテキストが出てきても、それは例外と見なされた。オスマンの歴史研究において新たなテキスト調査が始まったのは、ヨーロッパの歴史研究において、人間が自身を自律的個人として見るときだけ自分について書くという物語が壊れ、社会性を志向する社会でも自己証言文が書かれたということが指摘されてからのことであった。その後、人々はオスマン帝国で数多くのテキストを発見した。今までに知られたテキスト群が例外ではなかったということ、むしろ自分自身の生き方について書くことがオスマン国内でも広がっていたということがあきらかになった。興味深い例が、セイイド・ハサン (Seyyid Hasan) の日記である。彼は日記にしばしば友人や親類の訪問といった自身の交友関係について書き記している。このテキストを研究したスライヤ・ファローキ (Suraiya Faroqi) にとって、このハサンという人物は、ヨーロッパとの交流が活発になった19世紀になってようやくイスタンブールで意識の変化が生

---

<sup>18</sup> Georges Gusdorf, "Conditions et limites de l'autobiographie", in *Formen der Selbstdarstellung. Analekten zu einer Geschichte des literarischen Selbstporträts*, (Hg.) Günter Reichenkron und Erich Haase, Berlin: Duncker & Humblot, 1956, 105-123, hier 122; Roy Pascal, *Design and Truth in Autobiography*, Cambridge, MA: Harvard University Press, 1960.



じたのではなく、17世紀中盤にすでに個人化の過程が始まっていて、それはオスマン固有の伝統から説明されなければならないといったことの証拠といえる<sup>19</sup>。

非ヨーロッパ社会の自己証言文に関する研究は、個性と自伝との密接な関係というパラダイムと常に結合し、調査対象となる文化のなかで自伝を評価する際に、このパラダイムを基準としてきた。このような見解は、その研究自体の将来的発展を阻み、議論が不十分であったり進展しなかったりということにつながる。それにもかかわらず、暗黙のうちに唯一西洋的近代のみがモデルとなり、そのモデルが全ての非ヨーロッパ社会にも適用されるのである。

過去数十年間、歴史学の自己証言文研究では、個人化理論と、それに内在する普遍主義およびヨーロッパ中心主義を疑問視するという根本的な問題が投げかけられてきた。すなわち、自己証言文研究と自伝研究が使用してきた多くの概念が「18世紀後半の諸地域、特に西ヨーロッパ地域で発展し、それ以降、文化と時代を超越して効力を発揮してきた。今日この概念が諸方面から一般的に使用されているが、時間、場所、人物とテキストからは、その概念の特殊性をほとんど見つけ出すことができない」<sup>20</sup>という問題である。「個性はある種の人格概念に過ぎず、これまで研究されていない他の人格概念と併存または、共存するものである」<sup>21</sup>ということは見

---

<sup>19</sup> Suraiya Faroqhi, "Ein Istanbuler Derwisch des 17. Jahrhunderts, seine Familie und seine Freunde: Das Tagebuch des Seyyid Hasan", in *Selbstzeugnisse in der Frühen Neuzeit. Individualisierungsweisen in interdisziplinärer Perspektive*, (Hg.) Kaspar von Greyerz, München: Oldenbourg Wissenschaftsverlag, 2007, 113-126.

<sup>20</sup> Gabriele Jancke und Elke Hartmann, "Roupens "Erinnerungen eines armenischen Revolutionärs" (1921/1951) im transepochnalen Dialog - Konzepte und Kategorien der Selbstzeugnis-Forschung zwischen Universalität und Partikularität", in *Selbstzeugnis und Person - Transkulturelle Perspektiven*, (Hg.) Claudia Ulbrich, Hans Medick und Angelika Schaser, Köln/Weimar/Wien: Böhlau, 2012, 31-71, hier 34.

<sup>21</sup> Jancke/Ulbrich, "Individuum", (wie Anm. 1), 9.

過ぎされがちである。かつての自伝研究は、そのモデルを作るために、わずかなテキストしか参考にしておらず、それも大部分は、キリスト教信者で白人の知識人男性が書いたテキストであったために、近年の自己証言研究にとって史料の基盤を拡張することが切実な課題とされた。

### 3. ヨーロッパにおける自己証言文研究の新たなアプローチ

人は、さまざまな文化や時代のなかで自身の人生について著してきた。その魅力的な多様性と多層性が明らかになったのは、そうした著作が、自伝という狭いジャンル概念にとらわれず、テキスト類 (Textsortenbegriff) という広い概念をもって研究されるようになってからのことである。

エゴドキュメントという概念は、日記、回顧録、私信、その他自伝類の著作をひとつのテキスト群とみなすものであるが、1980年代にオランダの研究から伝播して以来、エゴドキュメントとされるテキストが次第に多く発見されるようになった。文学教育を受けた作家たちの小さな集団に代わって、エゴドキュメントの著者である、社会的階層も文化的背景も異なる男女が研究の焦点となった。著書『イカロスの飛翔』でスペインの大衆的自伝研究の基礎を築いたジェイムス・エイムラン (James Amelang) は、自分の人生について書くということが、ものを書く文化とは縁遠いと思われる人々にも広く普及していることを示した<sup>22</sup>。エリート層に属さない人々の書いたテキストへの関心もまた、ドイツ語圏の研究が1980年代以降に自伝史料を数多く扱うようになった理由の一つであった。

ドイツの歴史学が人類学へ視点を向けはじめたのにもない、「表現方法とその利用、歴史的主体の行動傾向と実際の行動」への関心が非常に高

---

<sup>22</sup> James S. Amelang, *The Flight of Icarus. Artisan Autobiography in Early Modern Europe*, Stanford: Stanford University Press, 1998.

まった。自己証言文の研究により、エリート層に属さない人々の生活や経験の範囲にアプローチできることが期待されたのである<sup>23</sup>。

フランスでは、当時まだ知られていなかった新しいテキストに関心が高まり、社会的制度や慣習にとらわれない、一個人が自分自身や、自身の周辺、共同体、もしくは世界に対する独自の見解を表現するような著作が、特に注目されるようになった<sup>24</sup>。フランスにおける諸研究が、私的で内密なものとの関連性を追求するのに対し、ドイツの自己証言文研究は、近世に焦点を当て、依然として近代的個人の発生という叙述について論争していた。両方の試みに共通していることは、どちらも自己証言文の歴史とそれに関連する個人的なもの、内密なもの、私的なものについての研究を、常に歴史学研究の展開に組み込んでいく点であり、その消失点がヨーロッパ近代なのである。

自己証言文研究は、一つのテーマや手法に焦点を当てる研究ではなく、定義が似たような史料群をまとめて扱うものである。最も広範で、こうした研究に最も利用される定義は、きわめて開放的である。これは、自己証言文の史料群を「自己」、または自分なりの見方で自身について物語る人物<sup>25</sup>という切り口でくくるといえるものである。こうした定義では、実際に書くことにまず焦点が当てられ、それは、記述する際の状況、目的、対象とされる読者層、書き手独自の視点といったことに関する問いにつなが

---

<sup>23</sup> Kaspar von Greyerz, Hans Medick und Patrice Veit, "Vorwort", in *Von der dargestellten Person zum erinnerten Ich. Europäische Selbstzeugnisse als historische Quellen (1500-1850)*, (Hg.) Kaspar von Greyerz, Hans Medick und Patrice Veit, Köln/Weimar/Wien: Böhlau 2001, IX-X.

<sup>24</sup> Jean-Pierre Bardet, Elisabeth Arnoul und François-Joseph Ruggiu, (Hg.), *Les écrits du for privé en Europe, du Moyen Âge à l'époque contemporaine. Enquêtes, Analyses, Publications*, Bordeaux: Presses universitaires de Bordeaux, 2010.

<sup>25</sup> Gabriele Jancke, "Jüdische Selbstzeugnisse und Ego-Dokumente der Frühen Neuzeit in Aschkenas. Eine Einleitung", in *Selbstzeugnisse und Ego-Dokumente frühneuzeitlicher Juden in Aschkenas. Beispiele, Methoden und Konzepte*, (Hg.) Birgit E. Klein und Rotraud Ries, Berlin: Metropol-Verlag 2011, 9-26, hier 14.

る。たとえそうした問いのすべてに答えることができなくとも、自分の文章に自分自身を入り込ませ、そこで自分自身を能動的に描いている書き手に焦点を当てることにより、自己証言の扱いは変わってくる。著者は、語る内容を決め、選択し、順序立てて並べ、意識的であっても無意識であっても、既存の物語を引っ張り出して伝えたり、場合によってはそれに手を加えたりする<sup>26</sup>。日記を書く人はよく他人の日記を手本にする。そうした人たちは文章の型を受け継ぐので、結局、一つの日記には、直接的な表現でただ書き記されたもの、文学的に高められたもの、自由に思いついて書かれたものが区別されることなく羅列されることになる。聖書や古典文学の文章を手本にしたり借用した場合には、比較的簡単にそのことがわかるが、自分とは異なる文化を背景にした文章を手本に人生を語っている場合は研究が難しい。このことは、特に英国の労働者の自伝研究にはっきりとあらわれている<sup>27</sup>。

自己証言は意味を与えるべきテキストである<sup>28</sup>。真正性が問えるような、確かで直接的な記録文書ではないし、自我を直接証明するものでもない<sup>29</sup>。自伝テキストを解読するためには、遂行性 (Performativität)、立場性 (Positioniertheit)、状況性 (Situiertheit) の意味に重点をおく研究が重要であるのと同様に、記憶、経験、アイデンティティ、空間や主体行為 (Agency) と関連した理論的研

---

<sup>26</sup> Gabriele Jancke, "Autobiographische Texte - Handlungen in einem Beziehungsnetz. Überlegungen zu Gattungsfragen und Machtaspekten im deutschen Sprachraum von 1400 bis 1620", in *Ego-Dokumente. Annäherungen an den Menschen in der Geschichte*, (Hg.) Winfried Schulze (Berlin: Akademie-Verlag, 1996), 73-106, hier 76.

<sup>27</sup> 例えば以下を参照。Simon Dentith, "Contemporary Working-Class autobiography: Politics of Form, Politics of Content", in *Modern Selves: Essays on Modern British and American Autobiography*, (Hg.) Philipp Dodd, London: Fran Cass, 1986, 60-80.

<sup>28</sup> Paul Ricoeur, *Zeit und Erzählung*, übers. v. Reiner Rochlitz, 3 Bde., Übergänge, München: Fink, 1988-1991.

<sup>29</sup> Kaspar von Greyerz, "Ego-documents: The Last word?", in *German History* 28. 3, 2010, 273-282, hier 280.

究もまた重要である<sup>30</sup>。なぜなら自己証言文は、自らを描き著すために意図された方法が重要であるのと同様に、著者の社会的立場もまた重要であるといった、きわめて特殊な状況の下で発生するからである。

真正性の問題と関連して、ジャンルもまた特別な意味をもつ。なぜなら、ジャンルは記述という行為ばかりか、読者の期待する姿勢にも影響するからである。自伝テキストは、真実であるとみなされ、またそうした要求に呼応して書かれるため、真正性はそのジャンルの積極的な効果として理解される<sup>31</sup>。ここで生じる疑問は、いかなる文化的、文学的手段によって真正性の効果が作り出されるのか、著者は書くことを通して何を訴えたいのか、どのような著術上の戦略を駆使するのか、ということである。そうした疑問に答えるには、自伝をテキストとして分析しなくてはならない。「木目にさからって」(“gegen den Strich” [1884年に刊行されたフランスの作家ジョリス＝カルル・ユイスマンスによる小説のタイトル]) 文章を読んだり、テキストのむこうの真実を探したりするのでは十分でない<sup>32</sup>。それは、前述のように、個人とその人の感性と経験をそれとなく推測するに過ぎない。権力関係も著述の際には重要である。真正性は自律と結びついている。誰もが真正性のあるものを書く資格があるとみなされているわけではない<sup>33</sup>。戦後ドイツの歴史叙述をみると、人々は一般的に自伝的史料に対してはきわめ

---

<sup>30</sup> 理論的な新たなアプローチについて主要なものを概観するには、以下を参照。Sidonie Smith/Julia Watson, *Reading Autobiography. A Guide for Interpreting Life Narratives*, 2. Edition, Minneapolis, London: University of Minnesota Press 2010, 213-234.

<sup>31</sup> Renate Hof, “Einleitung. Genre und Gender als Ordnungsmuster und Wahrnehmungsmodelle”, in *Inszenierte Erfahrung. Gender und Genre in Tagebuch, Autobiographie, Essay*, (Hg.) Renate Hof, Tübingen: Stauffenburg, 2008, 7-24.

<sup>32</sup> Esther Baur, “Sich schreiben. Zur Lektüre des Tagebuchs der Anna Maria Preiswerk-Iselij (1758-1840)”, in *Von der dargestellten Person zum erinnerten Ich. Europäische Selbstzeugnisse als historische Quellen (1500-1850)*, (Hg.) Kaspar von Greyerz, Hans Medick und Patrice Veit, Köln/Weimar/Wien:Boehrlau 2001, 95-109, hier 96.

<sup>33</sup> Dusini, *Tagebuch. Möglichkeiten einer Gattung*, (wie Anm. 7), 15ff.

て批判的であったが、自伝や日記の著者が重要な社会的地位についている場合は、その考えが脇へ追いやられたことがわかる。ここでは、その人物というよりむしろ職務が真正性を保証しているかのように見える<sup>34</sup>。改ざんされていない伝記的史料として長いこと批判をうけずに読まれていた作家たちの日記についても同様のことがいえる<sup>35</sup>。一方、ホロコーストの生存者たちの記憶をめぐる議論は、これと全く異なり、ジャック・プレッサー (Jacques Presser) が、こうした記憶に記録的性格があることを強調するために、結局エゴドキュメントの概念を導入するきっかけとなった<sup>36</sup>。

自己証言文を、現実の直接的なコピーと思わずに読むならば、あるいは著者がどの程度まで近代的個人の基準を満たしているか、内密なもの、私的なものへの願望をどの程度示しているかといった疑問に沿って読むならば、多様性と矛盾を抱えつつも、登場人物の視点からできごとについて考えたり書いたりすることが可能になる。その際には、自己の構築と他者の認識についての問題だけでなく、日常生活に関するテーマも重要になる。具体的には、幼少期、青少年期、家族において社会化がどのように行われたか、身体経験や身体認識、宗教と呪術、読書行為、時間と空間の認識、価値と規範、所属、権力関係と暴力経験、そしてとりわけ記憶と伝記的・歴史叙述的な意義付けといったことである。こうしたテーマに関しては、数多くの調査がなされたが、ここではその一つ一つについては取り上げない。

ヨーロッパの自己証言文研究で重点が置かれているのは、史料の目録化、史料の物質性の問題、および著作の文化史という枠組みにおける史料の価値に関する問題である。フランスでは近年、非常に多くの(数年前には3,800件

---

<sup>34</sup> Angelika Schaser, "Einleitung", in *Erinnerungskartelle. Zur Konstruktion von Autobiographien nach 1945*, (Hg.) Angelika Schaser (Bochum: Dr. Dieter Winkler, 2003), 7-16.

<sup>35</sup> Smith/Watson, *Reading Autobiography*, (wie Anm. 30), 15-18.

<sup>36</sup> Rudolf Dekker, "Jacques Presser's Heritage. Egodocuments in the Study of History", *Memoria y Civilización* 5 (2002), 13-37.

を超える<sup>37)</sup> 私的内面文献が整理されたが、それにより、文学作品という枠を越えた近世の著作文化の広がりが新たに認識されるようになった。フランスの研究は、前述のジェイムス・エイムランのスペインに関する作業と結びつく。イタリアの研究も家門記録 (livre de raison [字義どおりには会計簿]) を集中的に扱い、自分自身の生活を著す行為がいかに広がっていったかを示した<sup>38)</sup>。総じて、普及したテキストの数は18世紀以後急速に増えた。バーゼル大学の歴史学研究室にある自己証言文のデータバンクには、スイスの図書館と公文書館が所蔵する1500-1800年に書かれた870のテキストがある。その3分の1は日記であり、そのほとんどは18世紀に書かれたものであった<sup>39)</sup>。オランダでもまた、18世紀後半に書かれた自己証言文が顕著に増加した。1500-1814年に関して、ルドルフ・デッカー (Rudolf Dekker) のグループが1,121のテキストをまとめ上げた。デッカーは、自己証言文の大半をしめる日記に関して、政治的危機や戦争の時代には他の時代より極めて多くの日記が残されていることを示した<sup>40)</sup>。自伝的著作の変革や政治的制度転換の時代に一般的に増えるということは、30年戦争、フランス革命、第一次世界対戦、1989年の転換期に関する研究でも明らかにされている<sup>41)</sup>。

自己証言文は実にさまざまな形態で著される。時には序言、墓碑銘、事典の項目などに記入されている短い書き込みであったり、また時にはそれが大々的な作品であったりする。日記の場合も、非常に長いものがよく見

---

<sup>37)</sup> Jean-Pierre Bardet und François -Joseph Ruggiu, "Les écrits du for privé en France de la fin du Moyen Âge à 1914", URL: <http://www.ecritsduforprive.fr> [2012.4.10. 閲覧]

<sup>38)</sup> Giovanni Ciappelli, (Hg.), *Memoria, famiglia, identità tra Italia ed Europa nell' età moderna. Atti del convegno internazionale Trento 4 - 5 ottobre 2007*, Bologna: 2009.

<sup>39)</sup> Kaspar von Greyerz の率いた1996-2003に行われたプロジェクト。「ドイツ語圏スイスの自己証言文 (1500-1800) 心性史の史料として」 [<http://selbstzeugnisse.histsem.unibas.ch>]

<sup>40)</sup> Rudolf Dekker, "Egodocuments in the Netherlands from the Sixteenth to the Nineteenth Century", in *Envisioning Self and Status. Self Representation in the Low Countries 1400-1700*, (Hg.) Erin Griffey Hull 1999, 255-285.

<sup>41)</sup> 出典は以下による。Ulbrich/Medick/Schaser, *Selbstzeugnis* (wie Anm. 1), 7.

られ、何千ページに及ぶ物も多い。サムユエル・ピープス (Samuel Pepys) は1660-1690年のあいだに、3,000ページを超える日々の記録を残し、製本して自分の図書室の蔵書とした<sup>42</sup>。ハンブルクの商人ハインリヒ・ヴィット (Heinrich Witt, 1799-1890) は、国際的に成功をおさめた商人としてリマ (ペルー) で暮らし、活動していたが、10,000ページ以上もの日記を書いた<sup>43</sup>。ハインリヒ・ヴィットは、自分の伝記を日記の形態で著し、テキストのなかに初期の日記記録を挿入し、記憶や他の史料をもとに異なる時代をまとめて提示した<sup>44</sup>。彼の著作は、19世紀、20世紀になっても日記にはまだ種々のテキストがあったことを示す一例である。

日記は、さまざまなものを利用して書かれた。綴じていない紙に書かれたものも多く、カレンダーを利用したものもあった<sup>45</sup>。ドイツ語圏では、1550年以降、本の形状をしたシュライプカレンダー (Schreibkalender) が普及した。シュライプカレンダーの特徴は、左側にカレンダーが印刷され、右側は白紙であり、日々のメモを記入できるという点にある。このカレンダーはヨーロッパでは19世紀までに広く普及し、自伝的な著作を促進し、自伝を形作るのに貢献したとされる。しかしめったに保存されておらず、体系的に研究されることはそれ以上にまれであった<sup>46</sup>。

18世紀後半以降に日記の重要性が増し、今日では日記をつけることが一

---

<sup>42</sup> *The Diary of Samuel Pepys – A New and Complete Transcription*, 11 Bände; (Hg.) Robert Latham und William Matthews, London: Bell & Hyman 1970–1983.

<sup>43</sup> 現在 Ulrich Mücke と Cristóbal Aljovin de Losada により出版準備中。

<sup>44</sup> Christa Wetzel, "Heinrich Witt (1799-1892) und sein Tagebuch im Lima des 19. Jahrhunderts", in *Selbstzeugnis und Person - Transkulturelle Perspektiven*, (Hg.) Claudia Ulbrich, Hans Medick und Angelika Schaser, Köln/Weimar/Wien: Böhlau, 2012, 139-154, hier 144.

<sup>45</sup> Rudolf Dekker, "Egodocuments" (wie Anm 40), 260f.

<sup>46</sup> ヘッセン-ダルムシュタット方伯の家族は、1624～1790年に177のシュライプカレンダーを使っており、一家族における自伝的記録の伝統の基礎を築いた。Helga Meise, *Das archivierte Ich. Schreibkalender und höfische Repräsentation in Hessen-Darmstadt 1624-1790*, Darmstadt: Historische Kommission 2002



一般的になったということは確かである。ユダヤ調査研究所（YIVO）が1932年、1934年、1939年にヴィリニウスで、ユダヤ人の若者を対象に日記コンテストを開催したが、こうしたことは伝記的な著作への関心の高さを示すものである。コンテストでは900を超える自己証言文が集まり、そのうち300が残されている<sup>47</sup>。20世紀に行われたアンケート調査では、回答者の40%が、一度は日記をつけたことがあると答えた。日記をつけることは特に青少年のあいだに広まっていたようである。その際に少女と女性の比率が男性より明らかに高かった<sup>48</sup>。しかし刊行され、広く普及した有名な日記は、教育を受けたエリート男性によって書かれたものが大半であった。

日記がブルジョアの時代に流行した理由の一つとして、18世紀半ば以降、日記が教育のなかに取り入れられていったという点があげられる。父母たちは日記を教育の手段として利用した。この時代の最も有名な児童日記は、オットー・フォン・エック（Otto von Eck）によるものである。エックは、10歳から16歳までの1791年から1797年まで日記をつけた。彼の両親はオランダの上流階級出身であり、「何よりも読み物を厳格に監視することで、啓蒙された、政治的に正しい方向へオットーの成長を促そうとしていた。オットーはきたる19世紀の模範市民になるよう教育されなければならなかったのである。」<sup>49</sup>オットーの日記は、個人と社会、私的なことと公的なこと、直接的な表現と熟考され訓練により習得された表現の領域が互いに重なり

---

<sup>47</sup> Desanka Schwara, “*Offn weg schtejt a bojm*”. *Jüdische Kindheit und Jugend in Galizien, Kongrespolen, Litauen und Russland*, Köln/Weimar/Wien: Böhlau 1999, 89-106. Yivo = Jidišer Visensäfftlicher Institut (Schwara, 97).

<sup>48</sup> Susanne zur Nieden, *Alltag im Ausnahmezustand. Frauentagbücher im zerstörten Deutschland, 1943-1945*, (Berlin: Orlanda-Frauenverlag, 1993), 12.

<sup>49</sup> Arianne Baggerman, “Lost Time: Temporal Discipline and Historical Awareness in Nineteenth-Century Dutch Egodocuments”, in *Controlling Time and Shaping the Self: Developments in Autobiographical Writing since the Sixteenth Century*, (Hg.) Arianne Baggerman, Rudolf Dekker und Michael Mascuch, (Leiden: Brill 2011), 455-541.

合っていて、はっきりと区分できないということを示す一つの例である。それと同時にこれは、日記が、ある一定の歴史的状況の下で、近代的人間を創り出すために利用されたことを示す一例でもある。

自己証言文が、自己の、つまりアイデンティティの歴史の史料として利用されることはよくある。ガブリエレ・ヤンケ (Gabriele Jancke) は、近世の作家たちが執筆するときに、内的自己ではなく、社会的自己を中心に据えて執筆したという事例を数多く取り上げた。そこからヤンケは、自伝のテクストは、「自己」はもちろんであるが、共同体や帰属集団とも関係しているという結論に至った。これは、個人や人格にとって、「自己」に関する問題が、帰属集団や集団的文化と切り離せないことを意味する。つまり両者はたがいに緊密な関係にあるのである。いずれにせよ近世の自己証言文の著者にとってはそうである。こうしたことから、ヤンケは次のように推論した。つまり、「自己証言文の意味は、決して個別化されたできごとのなかにあるのではなく、社会的なできごとのなかにある。その枠組みのなかでは個人が享受できる社会的空間が用意されたり、創り出されたり、束ねられたりする。こうした史料群は、さまざまな社会や集団において社会性を具体的にはっきりと示す道を開く。その際、自己を描写する上で社会的ネットワークが中心的役割を果たすのである。」<sup>50</sup>

自己証言文によって、社会の価値観と行動様式を洞察し、また、人が規範とどのように接してきたかを知ることができる。このことは、自己や個人の問題がすでに時代遅れであるということの意味するのではなく、人は内的自己を社会的関わりと簡単に切り離すことはできず、人格をその人の歴史性のなかにおいてみるべきであるということの意味するものである。多くの文化において自己証言文は共同体や帰属集団と関係があるという認識は、自己証言文研究において非常に革新的なことであるとともに、研究

---

<sup>50</sup> Gabriele Jancke, "Jüdische Selbstzeugnisse", (wie Anm. 25), 15.

を複雑にするものでもあった。

こうした自己証言文の研究と関連して、伝統と近代の問題が生じる。それはもはや、私的であること、内面性、自己省察に特徴づけられる近代的個人の発展の問題としてではなく、伝統の会得と再解釈の問題として生じるのである。伝統と近代の相互関連性を捕捉するには、ピーター・バーク（Peter Burke）の次のような仮定を手がかりにするとよいだろう。すなわち、人は常に空間的、時間的環境に適応していくので、伝統は絶えず形を変え、新たに解釈され、再構築されるのだという仮定である。「人間は、自分が身を置く場所の文化から、自分にとって魅力的で、重要で、有益なものを選び出し、それを（意識的であれ、無意識であれ）既存のものに統合する。多くの人々が目新しいものに強く惹かれるが、新しい解釈や脈絡を再構成するプロセスを通して、獲得したものをすべて土着化させる。つまり、聴く者も観る者も受動的に受容せず、新しいものを能動的に取得し、それを再構成するのである。」その際に、人は自分が属する集団と共有する特別な「我有化した論理」に従う。自己証言文の著者は、起こったことを新たに解釈し、脈絡を再構成しなければならない。伝統と近代は、こうした手がかりに従えば、2つの対立し合うものとは考えられなくなる。それよりは、複雑な再解釈、取得、再機能化のプロセス探し出すことの方が重要なのである<sup>51</sup>。

#### 4. 自己証言文と文学ジャンルとのあいだに位置する日記

一般的に歴史学者たちは、日記が「純粹」な形式で存在するのはまれであるからということを描いて、日記を独自のジャンルと呼ぶのをためら

---

<sup>51</sup> Peter Burke, *Die Geschichte des "Hofmann". Zur Wirkung eines Renaissance-Breviers über angemessenes Verhalten*, übers. v. Ebba D. Drolshagen, Berlin: Wagenbach, 1996, 14.

う。さまざまな日記にみられるように、回顧しながら執筆することと、近い過去について定期的に日記を記すことのあいだの境界は不明瞭である。それ以外にも、日記には短く日常的な記録のみを書く時もあれば、冗長に自己省察を書くこともあり、一つのジャンルと見なすにはあまりにも雑多である。日記は何かについて説明したり、事実を隠したり、気晴らしをするためにも書かれた<sup>52</sup>。ある人は自己存在を確認する場所が必要で日記を利用し、ある人は自己検閲を行う。すなわち、ふさわしい描写によって一日に起こったことを修正する。時には日記が友人や親戚、大衆のために書かれることもある。このような場合、日記はコミュニケーション行為の産物である。アンネ・フランク (Anne Frank) の日記のように、日記自体が話し相手となる場合も同様である<sup>53</sup>。このように日記のさまざまな機能と形態が著作の戦略に影響を与え、日記を一つのジャンルにくくることに対する反対を生むのである。

ジャンルを固定した形ではなく、シドニー・スミス (Sidonie Smith) やジュリア・ワトソン (Julia Watson) が提言するように「社会行動」として理解する場合には<sup>54</sup>、ジャンルの問題を歴史的な自己証言文研究へと統合することがこれまで以上に重要となる。ジャンルの決定は、執筆のみならず、読書にも影響を及ぼす<sup>55</sup>。日記の形で書かれたテキストについて、読者はそれが「真実」であることを期待する。これはとりわけ、一つのテキストの

---

<sup>52</sup> Philippe Lejeune, "The Practice of the Private Journal. Chronicle of an Investigation (1986-1998)", in *Marginal Voices, Marginal Forms: Diaries in European Literature and History*, (Hg.) Rachel Langford und Russell West, Amsterdam: Rodopi, 1999, 106f.

<sup>53</sup> Dusini, *Tagebuch. Möglichkeiten einer Gattung*, (wie Anm. 7), 53.

<sup>54</sup> Smith/Watson, *Reading Autobiography*, (wie Anm. 30), 18. Carolyn R. Miller, "Genre as Social Action", in *Genre and the New Rhetoric*, (Hg.) Aviva Freedman, Peter Medway, London: Taylor and Francis 1984, 23-42.

<sup>55</sup> Natalie Zemon Davis: "Revealing, Concealing: Ways of Recounting the Self in Early Modern Times" 11-08-22, 2012.01.04公開。[<http://itunes.apple.com/us/itunes-u/early-modern-workshop-audio/id493085739> 2012.7.10. 閲覧]

本文あるいは序言やあとがきに真正性のしるしが現れるような場合である。日記の形で記録された、第一次世界大戦後に現れた記憶に関して、ゾフィー・ホイスナー (Sophie Häusner) は、そのような、たいていの場合は文学的であるテキストをめぐる公の議論もまた、それを「自伝的」で「歴史的」な真実として認めるのに役立つことを示した<sup>56</sup>。したがって文学者たちが、ジャンルそのものに由来する真正性の効果について述べることは正しい。

自伝的小説、回顧的記憶 (自伝) と日記の大きな相違点は、時間との関係であることは確かである。日記の著者は、自分の日常、人生、歴史的できごとを、通常、時間的に非常に近いところで話題にする。人間があるできごとをどのように体験し、それを消化するか、または、一定の立場を取るためにどのような動機をもつか、といったことを見いだすために、ドイツでは史料としての日記の重要性が、かなり集中的にナチズムや第二次世界大戦と関連づけて議論された。この時代は、記憶のなかで再構築されにくい。それは、その時代を経験した人々が、多くのことを消し去ろうとしているからである。1945年に軍事的に敗北し、ナチズム体制が崩壊した後、多くの人々がそれに関する記憶をはねのけた。マルガレーテ・ミッチャーリッヒとアレクサンダー・ミッチャーリッヒ (Margarethe und Alexander Mitscherlich) が強調するように、その時代の人々は、自己の過去から遠く距離をおいた<sup>57</sup>。少女たちがナチ時代にどのような日常を送ったのか、どのような方法でこの時代のできごとに参加したのかを知るために、ズザンネ・ツァ・ニーデン (Susanne zur Nieden) は1939-1945年に書かれた32の日記とメモ、

---

<sup>56</sup> Sophie Häusner, “Ich glaube nicht, dass ich es für mich behalten darf.” Autobiographische Veröffentlichungen von Krankenschwestern im Ersten Weltkrieg”, in *Selbstzeugnis und Person - Transkulturelle Perspektiven*, (Hg.) Claudia Ulbrich, Hans Medick und Angelika Schaser, Köln/Weimar/Wien: Böhlau, 2012, 155–171.

<sup>57</sup> Alexander Mitscherlich, Margarethe Mitscherlich, *Die Unfähigkeit zu trauern. Grundlagen kollektiven Verhaltens*. München: Piper 1967.

7件の記憶に関する報告、3冊の書簡集を調査した。彼女はこうした史料によって「政治と日常、公的なものと私的なもの、個人の意識とできごとがどのように絡み合っていたのか」を研究し、「この時代を経験した人々がこれまで思い出せなかったり、思い出したくなかったような感情と思考の世界」を明らかにしようとした<sup>58</sup>。そうした取り組みの過程を通して、日記は史料としての価値を認められるのである。日記は、時代を証明するものとなり、それによって記憶が社会の「文化的記憶」へと高められる。日記が歴史的文書として重要であるからこそ、この史料を体系的に考慮しつつ扱うことが肝心である。自己証言文に関する近年における集中的な研究と、この史料に対する歴史的、文学的な批判、そしてポストモダン、ポストコロニアル理論の取り込みは、そのための重要な基盤となっているのである。

(服部いつみ 訳)

---

<sup>58</sup> Susanne zur Nieden, *Alltag im Ausnahmezustand. Frauentagbücher im zerstörten Deutschland, 1943-1945*, (wie Anm. 48), 12.